

秩父ジオパーク 現地再審査報告書(公開版)

【日程】2015（平成27）年10月14－16日

【審査員】

中川和之（日本ジオパーク委員会委員）
平田大二（日本ジオパーク委員会委員）
鳥越寛子（日本ジオパーク委員会現地審査員）

【主な参加者】（敬称略）

秩父まるとジオパーク推進協議会長 久喜邦康（秩父市長）、同副会長代理 清水直人（横瀬副町長）、同副会長 石木戸道也（皆野町長）、同副会長 大澤タキ江（長瀬町長）、同副会長 福島弘文（小鹿野町長）、同協議会事務局長 鈴木日出男（秩父市観光課観光課長）、同事務局 富田貴夫（秩父市観光課）、同推進員 吉田健一（秩父市観光課）、同サポーター 宮城敏（秩父市秘書広報課長）、同協議会運営委員 小幡喜一（NPO秩父まると博物館理事）、同 永越信樹（NPOもりと水の源流文化塾理事長）、同 木村和恵（NPOちちぶまちづくり工房副代表理事）

【審査地点】

<1日目>

ミュージアム展望台、西武秩父駅、ジオトレイン、橋立鍾乳洞、浦山ダム、秩父ふるさと館、意見交換会（秩父芸術文化会館）

<2日目>

美の山、意見交換会（埼玉県立自然の博物館）、車窓見学（棚田、逆転層）、兎田ワイナリーレストラン、車窓見学（取方の露頭）、意見交換（おがの化石館）、講評

【審査概要】

秩父ジオパークは、2009年10月に「ジオサイトをつなげる全体のテーマがない」など多くの課題が指摘され、日本ジオパーク認定を一度見送られた。運営管理体制を確立し、埼玉県立自然の博物館との連携が動き始めた2年後の2011年9月、日本ジオパーク認定となった。

再認定審査では、実際のガイドが使っている拠点で説明を聞き、埼玉県立自然の博物館をはじめとする拠点施設を確認し、熱心にジオパーク活動を展開されている地域のNPO関係者らを含め、多くの方々とも意見交換を行った。

その結果、確認されたジオパークのボトムアップな活動は、限られた事務局体制による運営にもかかわらず、地域に着実かつ地道に浸透し、地域住民の自主的活動や様々な連携団体との事業へと繋がり、今後のさらなる展開も期待できることを確認した。

一方で、協議会を動かす連携の場は、年1回の協議会総会と、年4、5回の運営会議に留まっており、埼玉県立自然の博物館での意見交換で「もっと連携したい」というプレゼンがあっ

たほどだ。現状のテーマ設定や事務局・運営体制のままでは、せっかくの盛り上がりを持続可能であるとはいいがたいことは、審査の過程で事務局ら関係者との共通認識として確認された。最後の協議会長あいさつでも「再認定が、まさに秩父ジオパークを考えるいい機会であった。改めてしっかりとらえて、今後の方向性を考えていきたい」と、変化への決意を述べて現地審査を終えた。

【認定時に示された課題・改善すべき点】

1：首都圏の観光業者や観光ガイド等に積極的に宣伝、ガイドブックや案内マップの充実、駅周辺など目立つ場所に置く。

〔審査で確認したこと、今後の課題〕

西武秩父駅や秩父鉄道秩父駅には、一定の案内はあるが、内容的には不十分であり、置いてある場所も限られており、今後も関係者との連携による計画的な強化が必要である。看板類などは、タイトルに工夫が見られるものもあるが、「河成段丘（低位）」など、いきなり専門用語を使っているものも多く、改善が求められる。

2：拠点施設が小鹿野町と長瀨町の2ヶ所のみで、秩父市と他の町には整備されていない。基本方針を確立し、拠点の整備計画を早急に立案。

〔審査で確認したこと、今後の課題〕

徐々に施設整備が進められていることは確認したが、基本方針や整備計画は示されておらず、協議会として策定が求められる。

西武秩父駅の仲見世の空き店舗を活用したジオパークの拠点施設が、西武鉄道が行っている駅前の再開発次第では、存続が不明である。審査中に、審査員からの打診に西武鉄道側は協力的な反応だったが、運営委員会などの場でしっかり検討することが求められる。

3：施設老朽化が進んでいる秩父市の和銅宝物館のテコ入れ

〔審査で確認したこと、今後の課題〕

ジオパークの認定後、地元の境内から宝物館までのルートに階段や手すり等を設置するなど、整備が行われているとの説明は受けた。宗教施設も関係する地域の民間活動のため、2の基本方針や整備計画の策定検討のなかで、具体的な位置づけを検討して、どのようなサポートが適切なのか、よく検討して欲しい。

4：「大地の守り人を育む、ジオ学習の聖地」というテーマの見直し。

〔審査で確認したこと、今後の課題〕

事前の現況報告資料では「学習観光を主眼にPR」という説明がされたが、秩父ジオパークでは必ずしも学習観光に特化した活動に留まっておらず、実態と乖離したテーマであることが確認された。懸案と考えていた長瀨の船下りでのジオ的な解説についても、直接は確認できてはいないが、船頭さんたちがジオパークの当事者としての活動を始めていることを確認。「秩父銘仙」とジオの関わりや、これからさらに進めようとしているワイン作りとの連携も、このテーマでは表現できていないことは、関係者の共通認識になっていると確認できた。

このため、審査の総評の場で「ジオパークを目指す地域は、持続可能な地域社会の実現のために、ジオパークとして、その地域にあったやり方で、住民、行政、研究者などの関係者が、ともに考え続けているか、また、そのためにこれまでのやり方を変える覚悟があるか」という日本のジオパークの基本的な審査基準を、協議会長、副会長らと再確認。協議会長が「再認定が、まさに秩父ジオパークを考えるいい機会であった。改めてしっかりとらえて、今後の方向性を考えていきたい」と、変化への決意を述べた。

これによって、テーマの見直しとともに、保全と教育、活用のすべての面で、秩父ジオパークとしての基本計画の見直しや事務局体制の見直し・強化が図られることにつながることを期待される。

5：「地質学発祥の地」の説明が素人にわかりにくい。「地質学」を学習する場所がジオパークだと誤解されないよう工夫を。秩父や日本列島の成り立ちの考え方の変遷を、分かりやすく。

〔審査で確認したこと、今後の課題〕

最初の認定見送り時に「日本の地質学発祥の地は、重要なキーワード」と指摘し、認定審査時にも上記のように指摘したことの意味が、十分、認識されておらず、これらに対応しているとは言いがたい。

今回の審査を通して、なぜ「地質学発祥の地」なのかその説明がジオサイトを見ても伝わってこず、認定審査で期待した地質学の考え方の変遷を伝えるという努力もあまり見当たらない。

一方で、古くからの「ごんべえ石」と「ま石」の話に始まり、再審査で訪れた場所や地元の方々の活動などは、この地が発祥の地となっただけのジオ的な資産や人々の営みが豊富にあることも確認された。

今後の日本における秩父ジオパークのテーマの見直しのなかで、これらの課題をどう解決するか、専門家や事務局だけでなく、秩父ジオパークの担い手になっている方々との意見交換を大事にして検討して欲しい。

6：ジオガイドの増、ジオツアー参加者のすそ野を広げ、一般市民への浸透を。ラインくんだりや秩父鉄道など、大勢の観光客が楽しむ場所でのジオガイドなどが求められる。

〔審査で確認したこと、今後の課題〕

札所巡りのように、他の活動に『ジオ味』を付ける」という初期のジオツアーに留まっているところもあるが、まちなかの段丘での暮らしとジオを特産品の秩父銘仙につなげてまちあるきを行ったり、ジオサイトの近くに「ジオ」の名前が付いたしゃれた店が誕生するなど、裾野の広がりが見られる。秩父鉄道がジオトレインを実施、長瀨のライン下りでもジオパークの担い手意識を持って活動を始めていることは確認された。

ガイド機会が増えてくる中で、専門用語の受け売りではなく、それぞれが工夫をしてお客様の気づきや発見を大事にするジオガイドらしい活動が展開されていることも確認された。

今後は、JGNの理想のガイド8か条なども学びとして、専門家や博物館が知識を伝えるような学習ではなく、ガイド実践に基づいた専門家との協働によって、秩父ジオパークの魅力が一般市民にも確実に伝わる看板やガイドブック、パンフレットの見直しを進めることが期待さ

れる。

【審査で確認した項目ごとの現状】

1：ジオサイトと保全

各ジオサイトと「見どころ」は魅力に富んでおり、説明を聞くとそれぞれの繋がりが明らかになってくる。しかし、現在のテーマではそうした秩父ジオパークらしい大地と人のストーリーがうまく伝わり切っていない。秩父銘仙と水・段丘、札所等々といった文化的要素を大地のストーリーに絡ませることができれば秩父らしさがより伝わる。テーマの見直しは、必須事項である。その中では、日本列島において、ひいては地球サイズで秩父とはどのような場所なのか、大きな視点で秩父ジオパークが実感できるようなテーマやストーリー構築が求められる。

ジオサイトの保全は、基本的には秩父まるごとジオパーク推進協議会の運営委員会に属する1市4町の教育委員会が各地域を担当し、草刈りや歩道の整備等を行っている。国指定名勝および天然記念物である長瀨岩畳では、埼玉県、長瀨町、地域住民の協働による草木の除去、清掃や危険個所の補修等を行う長瀨岩畳クリーン作戦が展開されており、組織を超えた連携と、地域住民のジオサイトの保全意識の向上に大きな役割を果たしている。

また、地域住民が主体となって行っている保全活動としては、和銅保勝会の活動があり、秩父市の和銅遺跡や和銅宝物館周辺の整備、毎月1回の清掃活動などを積極的に行っている。今後も、協議会および関連団体が協議・協力しながら活動を展開することを期待する。

審査と前後して答申された国内初の複合指定天然記念物となる見込みの「古秩父湾堆積層及び海棲哺乳類化石群」は、秩父ジオパークのエリアそのものでもある。そこで求められている面的なストーリー作りや保全計画の策定は、まさに秩父ジオパークで必要な課題である。これを、従来のように担当者や博物館だけで行うのではなく、4年間のジオパーク活動で広がった多くの地域の担い手とともに、じっくり作るプロセスを構築することが求められる。これは、日本のジオパークにおける一つの象徴的な取り組みになることが期待され、活用面での観光優先に先走ることなく、将来を見据えた計画作りを望む。

2：教育・研究活動

学校教育としては、推進協議会の構成団体である1市4町の教育委員会が中心となり、各市町村の小中学校で屋内外でのジオパーク学習を継続的に実施している。教育教材としてDVDやガイドブックを作成するなどジオパーク教育のさらなる推進を図っており、ジオパーク学習が徐々に定着してきている。生涯学習としては埼玉県との連携事業として、彩の国いきがい大学のプログラムの一つとして毎年ジオパーク秩父講座が開催されているほか、放送大学埼玉学習センターでは、放送大学の学生を対象としたジオパーク講座シリーズが毎年開催されている。

このほか、公民館が中心となり地域の自主的なジオパーク学習が行われており、地域住民が、かつ楽しみながら学習活動を展開している。

各市町の取り組みが確実に地域に定着してきているが、市域を超えたオール秩父ジオパークの活動はまだ十分とはいえないため、連携を深めオール秩父の活動にしていくことが必要である。特に、多くの専門知を持った学芸員がいる埼玉県自然の博物館との連携の促進が期待され、

天然記念物指定でより注目されることになるおがの化石館の役割にも期待したい。

3：管理組織・運営体制

秩父まるごとジオパーク推進協議会の事務局は、1市4町（秩父市、横瀬町、皆野町、長瀨町、小鹿野町）で推進される「定住自立圏構想」の中心市である秩父市（観光課）が担っており、併任職員、臨時職員、サポーターを含め合計6名体制である。4町の主担当として教育委員会が窓口となり、各町のエリアを担当し、ジオサイト整備や保全、町内関係団体との連絡調整を行う形となっている。

日本ジオパーク認定後、秩父まるごとジオパーク推進協議会の会員だけでなく、外部連携団体のジオパークを活用した自主的活動が事務局の想定以上に盛んになってきていることは大いに評価できる。しかし、各地で起こっている数々の活動は、それぞれが独立した点の活動にとどまっており、線あるいは面へと繋がっていない。現事務局体制では多用な活動を結びつけ、秩父ジオパーク全体の活動にプロデュースするところまで追いついていない。他のジオパークでも散見されるが、ジオパーク事業は協議会事務局主催のみという意識が強く、協議会の参画団体が行っている事業を含めた秩父ジオパーク全体の事業計画が共有されていない。3カ月に1回程度開かれている運営委員会では、これだけ盛り上がってきている秩父ジオパークの運動を持続的に発展させていくのに不十分と言わざるを得ない。

秩父ジオパークのさらなる発展のためには、事務局体制や協議会運営体制を見直し、個々の自主的活動を秩父ジオパーク全体の活動に繋げていける総合プロデュース体制の構築が望まれる。これらは、テーマの見直しや、面的な保全計画と合わせて、10年先、20年先を見通したような、プランニングを図って欲しい。

4：地域の持続可能な発展とジオツーリズム

これまでの地道な活動が実を結び始め、地域住民や団体が秩父ジオパークの良さをアピールしようとボトムアップの活動が広がり始めている。拠点施設の整備も着実にすすめ、その数を増やすとともに、中心施設である埼玉県立自然の博物館はリニューアルされジオツーリズムの拠点となる施設整備、看板整備が整いつつあり、ジオパーク活動の質・量とも充実してきている。

一方、ちちぶ定住自立圏構想のもと1市4町が協定を結び開始した秩父地域おもてなし観光公社は、2014年には法人格を取得し、滞在型観光の促進、外国人観光客の増加、地域ブランドの確立と特産品の販売促進等に取り組むこととなっている。今後は、秩父ジオパークとおもてなし観光公社との連携あるいは役割分担をどう行っていくのか、秩父ジオパークが目指す持続可能な発展と十分に摺合せをして事業をすすめていく必要がある。

加えて、全体としてここが秩父ジオパークエリア内であるとか、秩父ジオパーク関連サイトあるいは施設であるということが直感的にわかるジオパークの可視化がまだまだ不十分である。看板やリーフレット施設案内など、できるだけデザインを統一し、秩父ジオパークやJGNのロゴを使うことが望ましい。看板の内容の見直しを含め、事務局だけで事業展開をするのではなく、ガイドなどジオパークの担い手とともに行うことが、地域の持続的な発展の鍵になることも留意すべきである。

5：国際対応

主要なパンフレット・出版物やウェブサイトは、英語表記等多言語化が十分とはいえない。世界ジオパークを目指すかどうかは別として、インバウンド 2000 万人の時代で都心にも近い秩父ジオパークが、秩父地域おもてなし観光公社と連携を図りながら、各種情報の多言語化、外国語対応職員やガイドの育成等々、外国人旅行客の対応を進めるのは当然といえる。

6：防災・安全

中山間地域にある秩父は、土砂災害の危険がある場所が 1,000 箇所以上とジオパークと防災が欠かせない地域である。土砂災害の対策としては、秩父市危機管理課が防災マップを作成・公開、安全・安心なまちを目指し、地震・土砂災害対策として設置された「災害時の安全対策委員会」に住民等もメンバーとして加わっている。ただ、現時点ではジオパークの運動との具体的な連携はないという。「ごんべえ石」と「ま石」のストーリーなどは、秩父地域での土砂災害との戦いの歴史とも言え、さらなるステップとして、秩父の地質がどのような自然災害につながってくるのか、というジオパークのストーリーで防災を考えることで、より防災への理解・意識を高めることが期待される。

【総評】

秩父ジオパークは 2011 年の日本ジオパーク認定以降、一定の事務局機能や運営体制の元で活動を進めた結果、現在の地域住民の自主的活動、様々な連携団体からのサポート、事業へと繋がり、一部は国内ジオパークの見本にもなりうる取り組みもでている。

しかし、こうしたボトムアップの活動が点の活動で終わっており、1市4町や組織機関のそれぞれの枠から脱却しきれていないため、秩父ジオパーク全体の活動として位置づけられ、結び付けられているとは言い難い。また、個々の地質や動植物、歴史文化の資源やストーリーは十分に魅力的だが、秩父ジオパーク全体の特徴あるストーリーとして大きなテーマに結び付けられているとは言い難い。

認定審査時に JGC から求められたテーマの見直しなどについては、当時は明確に「変わる覚悟」までを求めてはいなかったこともあって、4年間、テーマが十分意識されないまま活動が進められた。それぞれの活動そのものは、一定程度、ジオパークらしく展開されてきた結果、ここに来て改めてテーマがふさわしくないことが、今回の再認定審査で再確認された。

再認定審査の講評時に、久喜協議会長が「再認定審査が、まさに秩父ジオパークを考えるいい機会であったと思う。50年、100年を見据えた上で、秩父をいい方向に変えていく大変重要な取り組みである。再認定の後に、講評の内容を改めてしっかりとらえて、今後の方向性を考えていきたい」と最後に決意表明を行ったが、自らのジオパークの現状を関係者が広く再認識した機会であった。また、国内初の複合指定天然記念物となる見込みの「古秩父湾堆積層及び海棲哺乳類化石群」のストーリー作りや保全プラン構築は、まさにここまでボトムアップな活動で掘り起こされた秩父ジオパーク全域を見直す機会を与えてくれる。

テーマの見直しやストーリーの再構築、全域的な保全計画の策定を、地域全体で連携して取り組むためには、秩父市の観光部局に依存した今の事務局体制では困難であることは明らかで

ある。様々なボトムアップ活動を総合的に結び付け、秩父ジオパーク全体の活動としてコーディネートすることができれば、1市4町という広域ジオパークとしての相乗効果・強みを発揮してさらに質の高い秩父ジオパークを目指せる可能性があり、再認定審査時での協議会長の決意の言葉からも、そのような取り組みが今後進められることと期待される。

以上から、秩父ジオパーク地域は、日本ジオパークとして活動が改善されていると判断し再認定するものとする。